

原 著

介護福祉士養成施設の学生の介護に関する意識調査

横山正博¹⁾ 三原博光²⁾

宇部短期大学¹⁾

山口県立大学 看護学部²⁾

(平成10年 5 月20日受理)

A Research on How Carework is Perceived by
Students at Training Institutions for Certified Careworkers

Masahiro YOKOYAMA and Hiromitsu MIHARA

1) *Ube College*

Ube, 755-8550, Japan

2) *Faculty of Nursing*

Yamaguchi Prefectural University

Yamaguchi, 753-8502, Japan

(Accepted May 20, 1998)

Key words : carework, certified careworker,
training institution for certified careworker

Abstract

The purpose of this paper was to improve existing practices by investigating how carework is perceived by students at training institutions for certified careworkers. Questionnaires were sent to 333 students at 3 institutions. The results are as follows. Students are able to develop their own viewpoints about carework through the learning process. The students were introduced to home-bound carework by socialwork for leisure, and terminal care through classes or by syllabus. The students felt that the social status of careworkers was low and that they weren't appreciated enough by the public in general. Accordingly, the system for training and educating certified careworkers should be improved, and careworkers should work to improve caregiving after graduation from the institutions.

要 約

本論は、介護福祉士養成施設の学生に対するアンケート調査から学生の介護に対する意識を明らかにし、介護福祉士養成教育の現状と課題を把握することを目的とした。調査対象は、3 養成施設の333人の学生であり、調査期間は1997年2月から3月である。

その結果、学生は実習を含めた学習を通して、一人一人の介護観を形成している様子がうかがえた。また、今後の介護福祉士養成教育の課題として、必修科目及びシラバスに、在宅介護、余暇生活援助及び終末ケアを積極的に取り入れることの必要性が示唆された。さらに、学生は、介護職に対する社会的認知の不十分さを感じており、このことは、介護福祉士養成の制度上の改善及び学生の卒後の現場での社会的努力の必要性を示唆している。

目 的

介護福祉士が制度化されて10年経過するが、2年間という限られた期間の中で各介護福祉士養成施設（以下養成施設）がそれぞれの取り組みをしながら、介護福祉士養成教育（以下養成教育）の発展に寄与してきたといえる。しかし、10年経過した現在さまざまな課題が日本介護福祉士施設養成協会の研修会や介護福祉教育学会などで示されている。しかし、その課題の整理の過程において、ある意味では教育を受ける学生の意識を十分に検討していく作業が求められているといえよう。

これまで養成施設の学生に関する意識調査はさまざまあるが、生命観、死生観、就職及び非常に限定された意味における介護実習^{1)~6)}に関するものが多く、介護そのものに対する意識調査はあまり見あたらないように思われる。そこで、本研究は、養成施設の学生に介護に対する意識についてアンケート調査を実施し、養成教育の現状と課題を把握することを目的とした。

方 法

調査対象は、「社会福祉士介護福祉士学校職業能力開発校等養成施設指定規則」第7条第1項に規定された3養成施設の1年次及び2年次に在籍する学生333名である。養成施設の内訳は、短大1施設、専門学校2施設である。調査方法は、質問紙による集合アンケート調査とした。回答は、選択肢からの単一回答形式とした。調査期間は、1997年2月から3月にかけてである。質問内容項目は、①介護に対するイメージ、②

介護のあり方、③介護に対する社会の評価である。

結果と考察

1. 基本属性

1) 養成施設別学生数

養成施設別学生数は、短大（以下A校）87人（26.1%）、専門学校B（以下B校）193人（58.0%）、専門学校C（以下C校）53人（15.9%）であった。養成校の所在地は、A校は山口県、B校は岡山県、C校は兵庫県である。

2) 学年別学生数

1年次169人（50.8%）、2年次164人（49.2%）であり、ほぼ同数であった。養成施設ごとの学年別学生数を図1に示した。

3) 性別学生数

男性6人（1.9%）、女性327人（98.2%）であり、男性はいずれもA校の学生であった。

4) 平均年齢

全体の平均年齢は、 19.8 ± 2.1 歳であった。21歳以上は24人（7.2%）、最高年齢は41歳であった。養成施設別の平均年齢は、A校 19.5 ± 1.4 歳、

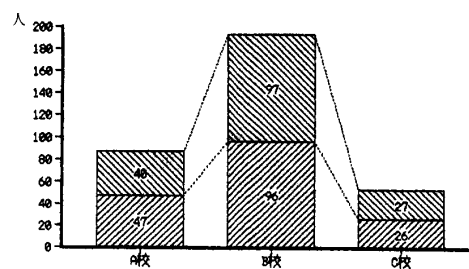


図1年 図2年

図1 養成施設ごとの学年別学生数

表1 介護に対するイメージ

単位人 () %							
質問内容	強く思う	まあまあ思う	あまり 思わない	全く思わない	わからない	回答なし	合 計
介護の仕事を通して人間的成長ができる	219(65.8)	102(30.6)	7(2.1)	1(0.3)	4(1.2)	0(0.0)	333(100.)
介護は汚れる仕事だ	3(0.9)	49(14.7)	143(42.9)	131(39.3)	5(1.5)	2(0.6)	333(100.)

単位人 () %							
質問内容	強く勧める	まあまあ 勧める	あまり 勧めない	全く勧めない	わからない	回答なし	合 計
自分の子どもが介護の仕事をした いたら勧める	52(15.6)	164(49.2)	18(5.4)	8(2.4)	90(27.0)	1(1.2)	333(100.)

B校19.9±2.4歳, C校19.9±1.6歳であった。

2. 介護に対するイメージ (表1)

1) 介護の仕事を通して人間的成長ができる と思うか

65.8% (219人) が「強く思う」, 30.6% (102人) が「まあまあ思う」としており, ほとんどの学生が人間的成長を期待していた。つまり, あるべき将来の自己像と介護職に対するイメージが重なっていると思われる。

2) 自分の子どもが介護の仕事をしたとい ったら勧めるか

64.9% (216人) が「強く勧める」あるいは「まあまあ勧める」とし, 肯定的であった。一方, 「全く勧めない」あるいは「あまり勧めない」としたのは, わずか7.8% (26人) であった。「わからない」が27.0%と約4分の1を占めたのは, 自分の職業と自分の子どもの職業の関連については, 実際に子育てをしてみないとわからないという理由があると思われる。

3) 介護は汚れる仕事だと思うか

42.9% (143人) が「あまり思わない」, 39.3% (131人) が「全く思わない」としており, 82.3%の学生が「介護は汚れる仕事」だとは思っていないかった。一方, 逆に15.6%の学生が, 「介護は汚れる仕事」だという否定的イメージをもっていた。井村らの研究においても³⁾, 学生の介護に対する否定的イメージが少ない割合ではあるが存在することが指摘されており, 見過ごしてはならない数値であるといえよう。

また, 学年別の回答の関連性について, χ^2 検定した結果, 有意差を認めた ($\chi^2=20.39$ $df=4$ $p<0.01$)。2年生の方がより「介護は汚れる仕

事」だとは思っておらず, 1年生の方がより「介護は汚れる仕事」であると思っている傾向があることがわかった。

さらに, この質問と2)の質問の回答の関連性について, χ^2 検定した結果, 有意差を認めた ($\chi^2=30.97$ $f=16$ $p<0.05$)。「自分の子どもが介護の仕事をしたといったら強く勧める」と回答した学生は, 「介護は汚れる仕事だとは全く思っていない」と回答している傾向にあることがわかった。自分の子どもに介護の仕事を強く勧めるとした学生は, 介護の仕事に対してかなり強い信念を持っていると思われる。

3. 介護のあり方 (表2)

1) 老人の介護は施設よりも家庭でもっと行 うべきだと思うか

26.4% (88人) が「強く思う」, 47.4% (158人) が「まあまあ思う」としており, 73.8%の学生が老人介護は家庭でもっと行うべきとした。一方家庭での介護に対して積極的な思いをもたない学生も26.1% (87人) と4分の1存在したことは特記すべきことである。

介護を家庭かあるいは施設等で行なうのがよいかは, 利用者個別の理由がありどちらがよいとは断定できない。しかし, この結果は, 在宅介護の知識や技術に関する講義, 演習及び実習を養成教育に取り入れていくことの必要性を示唆していると思われる。

2) 老人の終末期を迎える場所はどこが適切 だと思うか

85.3% (284人) が「在宅」としており, 13.8% (46人) がわからないとした。「在宅」とした学生がほとんどであったのは当然のことである

表2 介護のあり方

単位人（ ）%										
質問内容	強く思う	まあまあ思う	あまり 思わない	全く思わない	わからない	回答なし	合 計			
老人の介護は施設より家庭 でもっと行うべきだ	88(26.4)	158(47.4)	53(15.9)	4(1.2)	30(9.0)	0(0.0)	333(100.)			
単位人（ ）%										
質問内容	施 設	病 院		在 宅		わからない	合 計			
老人が終末期を迎える適切 な場所	2(0.6)	1(0.3)		284(85.3)		46(13.8)	333(100.)			
単位人（ ）%										
質問内容	健 康	人間関係 の 調 整	余暇活動	機能回復 訓 練	地域社会と の 連 が り	家族との 連絡調整	わからない	そ の 他	回答なし	合 計
介護をする時特に配慮する 面	85(25.5)	44(13.2)	53(15.9)	21(6.3)	50(15.0)	33(9.9)	13(3.9)	28(8.4)	6(1.8)	333(100.)
単位人（ ）%										
質問内容	叱 る	部 屋 に 閉じこめる	禁止しない	落ちつか せ る	無視する	わからない	回答なし	合 計		
痴呆性老人の徘徊行動に対 する対応	1(0.3)	0(0.0)	189(56.8)	126(37.8)	0(0.0)	14(4.2)	3(0.9)	333(100.)		
単位人（ ）%										
質問内容	話し相手	身の回り の 世 話	医療的ケア	家族との 連絡調整	余暇活動 の 世 話	金銭管理	期待しない	そ の 他	回答なし	合 計
老後に介護者から何を期待 するか	173(52.0)	58(17.4)	14(4.2)	16(4.8)	34(10.2)	0(0.0)	12(3.6)	17(5.1)	9(2.7)	333(100.)
単位人（ ）%										
質問内容	強く思う	まあまあ思う	あまり思わない	全く思わない	わからない	合 計				
ターミナルケアの学習の必 要性	232(69.7)	88(26.4)	4(1.2)	1(0.3)	8(2.4)	333(100.)				

う。「わからない」とした学生が13.8%存在したことは、家庭が必ずしも老人にとって安らげる場所ではなかったり、老人を受け入れることを快く思っていない等の現状を踏まえていたのかもしれない。

3) どのような面を配慮して介護を実施しようと思うか

「健康」が25.5% (85人) と最も多く、以下「余暇活動」15.9% (53人)、「地域社会とのつながり」15.0% (50人)、「他の入所者との人間関係の調整」13.2% (44人) であった。

「健康」の割合が最も高かったことは、要介護者は常に健康状態との関連で把握する必要があるという介護の基本原則を学生が十分踏まえていたことの表れと思われる。しかし、「健康」に次ぐ回答をみると、身体的な生活⁷⁾ではなく、

社会・文化的な生活⁸⁾を配慮して介護を実施しようとしている意図がうかがえた。施設入所者のみならず在宅生活者にとっては、その生活時間の多くが余暇生活に当たり、このことに着眼する視点を学生がもっていたことは特記すべきことであろう。このことは、養成教育に余暇生活あるいは余暇生活援助に関する内容を取り入れる必要性を示唆しているといえよう。

4) 痴呆性老人の徘徊行動に対してどのような対応が必要と思われるか

利用者の中でも特に対応困難な人が多い痴呆性老人の徘徊行動に対する対応について、「禁止しない」が56.8% (189人)、「落ち着かせる」が37.8% (126人) と二分された。

「禁止しない」を徘徊行動に規制を設けず受容すると解釈し、「落ち着かせる」を徘徊行動を

表3 介護に対する社会の評価

質問内容	単位人 () %					合 計
	強く思う	まあまあ思う	あまり思わない	全く思わない	わからない	
社会の人々が介護の仕事にもっと理解して高い評価を与えるべきか	147(44.1)	138(41.4)	35(10.5)	1(0.3)	12(3.6)	333(100.)
介護の仕事は看護婦, OT, PTの仕事と比べ社会的に身分が高いと思うか	3(0.9)	24(7.2)	191(57.4)	94(28.2)	21(6.3)	333(100.)
地域の人々は、老人ホームを好意的にみていると思うか	6(1.8)	50(15.0)	227(68.2)	12(3.6)	38(11.4)	333(100.)

受容するというよりも介護者が強制的に関与し生活に適應させる、あるいは徘徊行動はとるべき行動ではないと説得させると解釈するならば、37.8%の学生が「落ち着かせる」としたことは特記すべきである。

また、学年別の回答の関連性について、 χ^2 検定した結果、有意差を認めた($\chi^2=13.63$ df=3 $p<0.01$)。「その行動を禁止しない」とした割合は2年生の方が多く、「落ち着かせる」とした割合は1年生の方が多かった。「落ち着かせる」の意味を先述のように解釈すれば、1年生の方が痴呆性老人の徘徊に対する対応についての知識は未熟であるといえよう。

5) あなたが老後を迎えたとき、介護者(専門家)からとくに何を期待するか

「話し相手」が52.0% (173人) と最も多く、次いで「身の回りの世話」17.4% (58人)、「余暇活動の世話」10.2% (34人) であった。

学生が将来介護を受けるという立場から介護者に最も期待したものは、介護者とのコミュニケーションであった。これは、自分の老後の生活に対して孤独を予測していることあるいは現在の介護の現場で介護者とのコミュニケーションの不足を感じていることを反映していると思われる。次に期待したのは余暇活動援助であり、これは介護の実施上配慮すべき点としても上位にあげており、余暇活動援助の重要性を学生は十分認識しているといえよう。

6) ターミナルケアについてもっと学習する必要があると思うか

69.7% (232人) が「強く思う」、26.4% (88人) が「まあまあ思う」としており、ほとんどの学生がターミナルケアの学習の必要性を感じていた⁵⁾。今後の養成教育には、ターミナルとい

う枠を超えた死の教育(デスエデュケーション)あるいは死生学(サナトロジー)等を積極的に取り入れて行くべきであろう⁴⁾。

4. 介護に対する社会の評価(表3)

1) 社会の人々が介護の仕事にもっと理解して高い評価を与えるべきか

147人(44.1%)が「強く思う」、138人(41.4%)が「まあまあ思う」としており、85.6%の学生が介護の仕事にもっと高い評価を与えるべきであると思っていた。つまり、社会的認知がまだ不十分であるということであろう。

この結果は、秋山ら⁹⁾の社会福祉士及び介護福祉士等を対象とした意識調査において、介護福祉士は専門職として承認されていないと示したものと一致しており、学生も現場の介護福祉士も社会的認知について同じ思いであることがわかった。

2) 介護の仕事は、他の専門職である看護婦、OT、PTの仕事と比べ社会的に身分が高いと思うか

57.4% (191人) が「あまり思わない」、28.2% (94人) が「全く思わない」としており、85.6%の学生が看護婦などの専門職と比べて身分は高いと思っていなかった。

この結果は、学生が必ずしも看護婦などの専門職に比べて低く思っていることを示すものではなく、対等であると思っているという内容も含まれていると考えられる。しかし、実質的な介護福祉士の待遇といった面からは、看護婦などの職種と比較して低いのが実状であり、そのことを学生がよく把握している結果であるともいえる。

また、この結果は、先述した秋山らの調査において介護福祉士が専門職として承認されない

理由として社会的な地位が低いことをあげており、このこととも関連があると思われる。

3) 地域の人々は、老人ホームを好意的にみていると思うか

68.2% (227人) が「あまり思わない」、3.6 % (12人) が「全く思わない」としており、71.8 %の学生が、地域の人々は老人ホームを好意的にみていないと思っていた。この結果は、介護の仕事が社会的承認を得られていないと学生が思っていたことの一部を反映していると思われる。

ま と め

B校、C校は女性を対象とする養成施設であり、また平均年齢からみると多くの学生が高校卒の現役生であることから、回答の全体的傾向は、概ね現役で入学してきた女性の意識を反映しているといえよう。

介護に対するイメージについては、非常に肯定的にとらえている学生が多かった。しかし否定的イメージを持つ学生もいることも見過ごしてはならない。一方、否定的イメージを持つ学生は、1年生の方に多い傾向があり、2年生に進級し実習などをさらに経験していくうちに、そのようなイメージが払拭されていくのではないと思われる。

介護のあり方についての質問は、学生の介護観の核となる内容を問うものでもあり、養成教育の本質を問うものでもある。学生の介護観は、実習を含めた学習を通して基礎的な部分が形成されつつあるといえよう。特に、痴呆性老人の徘徊行動に対する対応については、2年生の方が十分な知識を持っている傾向にあり、学習の

効果が如実に反映された結果と思われる。今後の養成教育の課題としては、必修科目及びシラバスを再検討し、特に在宅介護、余暇生活援助及び老いることあるいは死の問題を科目あるいはシラバスの中に積極的に取り入れることの必要性が示唆された。

学生は、介護職がまだ社会に十分認知されておらず、社会的身分も十分でないと意識していた。このことは介護福祉士養成の制度上の改善及び学生の卒後の現場での社会的努力の必要性を示唆している。例えば、制度上の改善という点では、養成施設の卒業者に対しても国家試験を課せること、修業年限の延長などが課題であろう。現場での社会的努力という点では、人間性を涵養し、さらに科学的介護が実践でき、ケアマネージャーなどのように高度な専門的な知識や技術をもった介護福祉士として実践していくことも重要な課題であろう。

今回の調査のサンプル数は333であったが、対象とした養成施設数は3施設のみであり、地域や養成教育の経過年数等に偏りがあるため、全国規模での調査が必要であろう。

最後に、先進諸国の中で老人介護に関する専門的資格が制度化されているのはわが国とドイツのみであり、その意味では今回の調査結果は国際的評価にもつながると考えられる。将来的には、ドイツの養成施設の学生と同じ内容の意識調査を実施し、いわば国際比較を行い、国際的レベルにおける老人介護のあり方等についても考察する予定である。

なお、本研究の一部は日本社会福祉学会第45回全国大会で報告した。

文 献

- 1) 井村圭壮 (1995) 介護福祉士養成施設学生の生命観等に関する意識構造研究 — 看護系・医学系学生との比較分析を通して — 『社会福祉研究の新基軸』社会福祉研究シリーズ, 18, 社会福祉研究センター, 1—8.
- 2) 井村圭壮, 片山信子, 田路慧, 岡野初枝, 掛橋千賀子, 森下早苗 (1996) 生命観に関する介護福祉士養成施設学生の意識構造研究 — 看護系・医学系等との比較分析を通して — 岡山県立大学短期大学部研究紀要, 3, 59—68.
- 3) 井村圭壮, 相澤譲治 (1997) 介護福祉士養成施設学生の就職意向に関する調査研究. 介護福祉教育, 3(1), 20—23.

- 4) 小河育恵, 斎藤美智子 (1996) 介護福祉士養成における死の教育 — 学生の死に対する意識調査を通して —, 介護福祉教育, **2**(1), 38—41.
- 5) 斎藤美智子, 小河育恵 (1997) 介護福祉士養成における死生観教育 — 短期大学他課程生との比較 —, 介護福祉教育, **3**(1), 24—27.
- 6) 横山正博, 久保田トミ子, 中村敦子, 涌井忠昭, 西村洋子 (1993) 介護実習における学生の評価について — 実習終了後における実習状況調査結果の分析 —, 宇部短期大学学術報告, **30**, 77—85.
- 7) 西村洋子 (1997) 身体的生活への援助, 西村洋子編, 介護概論, 初版, メヂカルフレンド社, 東京, pp 11—122.
- 8) 横山正博 (1997) 文化的・社会的な生活への援助, 西村洋子編, 介護概論, 初版, メヂカルフレンド社, 東京, pp 122—129.
- 9) 大阪市立大学生活科学部人間福祉学科社会福祉学研究室 (1996) 社会福祉従事者の実践と意識に関する全国調査 [社会福祉士・介護福祉士の課題と展望].